Mahābhāṣya ad P1.3.1研究 (7)

小 川 英 世

1.4.1.7.4.1. [BHĀṢYA]

vt. 7:「upasarga」は、〈行為〉の限定者である(kriyāviśeṣaka upasargaḥ)[180]。

{pacati} と言われたとき、[ある]〈行為〉が理解される。その [〈行為〉] を [{prapacati} において「upasarga」である]〈pra〉は限定する。

[反論] まずもって次のような場合、すなわち「dhātu」が「upasarga」を逸脱するという場合 (yatra dhātur upasargaṃ vyabhicarati) には確かにこのように言うことができる。しかし実に {adhyeti} (adhi+√iK+lAṬ,「彼は思い出す」) {adhīte} (adhi+√iṄ+lAṬ,「彼はヴェーダ学習をなしている」) という事例におけるように [「dhātu」が]「upasarga」を逸脱しない場合にはどうして [このように言うことができよう] [181]。

[答論] これらの事例においては、たとえ「dhātu」は「upasarga」を逸脱しないとしても、しかしながら「upasarga」は「dhātu」を逸脱する。それゆえ我々は次のように考える。

この〈adhi〉の他の事例 [すなわち、〈adhi〉が当該の「dhātu」√iKあるいは√iṄ以外の「dhātu」に先行して使用されている事例] における意味と同じ意味が当該事例においても [〈adhi〉の意味である]。

[問い] しかしながら、他の事例における〈adhi〉の意味とはどのようなものか。

[答え]〈adhi〉は上位性 (uparibhāva) を指示する[182]。

[PRADĪPA]

「〈adhi〉は上位性 (uparibhāva) を」：それゆえ、{adhīte} の意味は、

彼は優れた意味（viśiṣṭārtha）と結びついていることばの読誦（paṭhana）をなしている、あるいは、彼は教令（vidhi）に基づいて［読誦を］なしている、ということである。{adhyeti} というこの項目においては、優れた、想起（smaraṇa）という形の知識が「dhātu」の意味である[183]。

ノート（24）

カーティアーヤナは、vt.3で術語「dhātu」に関して「〈行為〉（kriyā）を表示するものが「dhātu」［と呼ばれる］」という意味論的な定義規則を受け入れた場合、「dhātu」と接辞からなる複合体（saṃghāta）、「upasarga」と「dhātu」と接辞からなる複合体に対してその定義規則が過大適用となることを指摘し、さらにvt.4で、その理由を、実際の言語運用の場で〈行為〉が理解されるのは、そのような複合体からである点に求めた。そしてvt.6では、言語分析の場では、「dhātu」と接辞からなる複合体に関して、同形項目の継起に対応して同一性が認められる意味の継起がある場合、意味の差異の根拠は複合体自体の差異ではなく、それぞれの同形項目の対項目の差異に求められること、すなわち、〈有意味性〉は複合体自体ではなくその各部分に確立されることを述べ、さらに複合体からの有意味単位の抽出と抽出された各有意味単位への意味配当の方法であるanvayaとvyatirekaに基づく推理に依拠することによって接辞ではなく「dhātu」だけに〈行為〉に対する表示者性が確立されることを述べた[184]。次に問題となるのは「upasarga」と「dhātu」と接辞の複合体に対する術語「dhātu」の定義規則の過大適用をいかに回避するかということである。すでに接辞部分にはその意味として〈行為〉が配当され得ないことは確立された。したがっていま検討さるべき問題は、畢竟「upasarga」と「dhātu」からなる複合体に関して定義規則の過大適用をいかに回避するかということである[185]。

実際の言語運用の場では、「dhātu」と接辞がそうであるように、「upasarga」と「dhātu」は複合体として使用され、自体的に存立するものではない。それらは単に文法学の場で、特定の文法操作のために自体的に存立するものとみな

されるに過ぎない。バルトリハリはこのことを次のように述べている。

「オーグメントaṬ[186]などの［望ましい］配置［を得る、といった文法操作］のために、文法学では、「dhātu」と「upasarga」は切り離されたものとして構想される。しかしながら［実際の言語運用の場では］まさに「dhātu」はそのように［「upasarga」に限定されたものとして］ある。」[187]

さらに続けて彼は、実際の言語運用の場でのそのような「dhātu」の在り方の文法学への直接的な反映を次のように指摘している。

「すなわち、「upasarga」を有する項目sam＋√grāmaの後に文法操作がなされることが文法学文献に述べられており[188]、［dhātupāṭha中に（X. 376)、{saṃgrāma yuddhe}（『saṃgrāmaは戦いの意味で［生起する］』）というように、戦闘という］そのような特定の〈行為〉(kriyāviśeṣa) が［意味項目として、「upasarga」〈sam〉と√grāmaの］複合体（saṅghāta）とともに導入されている（prakramyante)。」[189]

それでは、「upasarga」と「dhātu」の複合体に関して、vt.6に述べられた、〈有意味性〉がその複合体自体ではなくそれを構成する各部分に確立される論理はどのように説明されるのであろうか。パタンジャリはここで「upasarga」と「dhātu」間に〈逸脱〉の関係性を指摘している。まさにこの指摘によってその論理が示唆されているのである。ただ〈逸脱〉という関係性で両者を捉えるのは、「dhātu」と接辞の場合とは違って、「dhātu」は必ずしも「upasarga」と共起することがないからであり、さらにvt.7に提言されるように「upasarga」に対応するとみなされる意味が〈行為〉に対する限定者として機能すると考えられるからである。言うまでもなく、xがyに対する限定者であるというとき、xはyのx以外のものとの関係を排除する。yがx以外のものと結びつく、すなわち、yがxに対して〈逸脱〉の関係にある場合にのみxはyに対する限定者たり得るのである[190]。そしてこのような場合、同形項目の継起に対応した同一の意味の継起が前提される。

カーティアーヤナは、「upasarga」は〈行為〉の限定者（kriyāviśeṣaka）であると述べ、そしてこのことをパタンジャリは、{pacati} から理解される意

味を「upasarga」である〈pra〉は限定する (viśinaṣṭi)、というように説明した。ところで、パタンジャリはより直截に「upasarga」の本質について次のように述べている。

「しかしながら、「upasarga」とは次のような本質を有するものである。すなわち、〈行為〉を表示するある何らかの項目が使用されるとき、[「upasarga」は]〈行為〉に存する差異化要素 (kriyāviśeṣa) を表示する。」[191]

文法学の伝統におけるこのような行為限定者としての「upasarga」観はバルトリハリによって次のように説明される。

「ある [「dhātu」] が表示する〈行為〉] に可能的に存在する (saṃbhavin) 差異化要素 (bheda) は [「dhātu」] 単独ででは示されない。[それらの差異化要素は「dhātu」が] 〈pra〉〈parā〉といった「upasarga」と結合したとき、[それらによって] 顕現せしめられる (vyajyante)。」[192]

プニィアラージャ (Puṇyarāja) はこれを次のように説明する。

「ある [「dhātu」] が表示する〈行為〉]、たとえば√pacなど [が表示する〈行為〉] には卓越性 (prakarṣa) などが可能的に存在するから、[さらに] それらは [「dhātu」] 単独ででは理解されないから、[その「dhātu」の] 「upasarga」との結合からそれら [卓越性など] が理解される。したがってそれら [「dhātu」] が表示する〈行為〉] に関しては、「upasarga」が [それらに存する] 差異化要素 (viśeṣa) の標示者 (dyotaka) であると言われる。」[193]

バルトリハリの上記詩頌に明示されているのは、「upasarga」は〈行為〉に対する差異化要素を顕現せしめるもの、それの標示者であるという考えである。ここで「upasarga」とそれに対応すると考えられる意味との関わりについて若干触れておこう。バルトリハリは次のように述べている。

「それ [「upasarga」] は、[〈行為〉に存する] 差異化要素 (viśeṣa) の表示者 (vācaka) である [とも考えられる] し、あるいは [その差異化要素の] 可能的存在性に基づいて [それらの] 標示者 (dyotaka) である [とも考えられる] し、さらにあるいは「dhātu」に [特定の限定的な〈行為〉に

対する表示] 能力を与えるために [「dhātu」の] 協力者 (sahakārin) としてそれは使用される [とも考えられる]。」[194]

さらにこれに対するVṛttiには次のように述べられている。

「師匠たちは「upasarga」について、それは表示者 (vācaka) である、それは標示者である、それは他の項目との共表示者 (sahābhidhāyin) である、というように三様に理解している。それらのうち、[「upasarga」がそれによって実際には] 表示されない (anabhihita) のにもかかわらず、[表示されるものとして] 意味を付託せしめるとき (āropayat)、それは表示者であると宣せられる。[「upasarga」が] 顕現していない (anabhivyakta) 可能的に存在している意味を顕現せしめるとき (abhivyañjayat)、それは標示者であると認められる。[「upasarga」が自己以外の項目] それ自体から得られる特定の [表示] 能力だけを与えるとき、それはsvārthika接辞 (没意味接辞) のように共表示者であると確定される。」[195]

「upasarga」は、それに対応する特定の意味が想定されるとき、その意味に対して標示者か表示者として関わり、対応する特定の意味が想定されないときには自己が添加される基体が表示する意味とは異ならない意味を表示するsvārthika接辞のように共表示者として関わると考えられている[196]。このVṛttiで興味深いのは、「upasarga」が表示者であるということは、それに対応する意味の付託の上に成り立つという指摘である。「upasarga」は、それに対応する意味があるとき、標示者であるというのが文法学派の定説である。それでは、「upasarga」が標示者であるというとき、対応すると考えられる意味 (dyotya, 標示対象) とそれはどのように関わるのであろうか。次のVṛttiを見よ。

「標示するということ (dyotana) も二様に考えられる。顕現していないもの (anāvirbhūta) を顕現せしめること (āvirbhāvana)、あるいは [複数のものが] 排除されることなく生起することが想定されるときに (avyudāsaprasaṅge)、他の種類のものを排除して (prakārāntaravyudāsena) 特定のものに制限すること (avadhāraṇa) である。」[197]

「Saṅgrahaの作者は次のように述べている。『可能的な存在として現に在る、

他の項目の恩寵なくしては制限が得られない (alabdhaniyama) そのような意味を制限するから (niyamayat)、標示者は、表示者としてのあり方 (vācakatā) を超える。』〈行為〉一般を表示する「dhātu」が単独で [使用されて] いるときには制限を得ていないもの (aprāptaniyama) が、{prapacati} {prakaroti} というように「upasarga」が [一緒に] 起こることによって特定の〈行為〉(kriyāviśeṣa) として顕現せしめられる。」[198]

「upasarga」の標示機能には潜在している意味を顕現せしめる機能と意味を制限する機能とがある。しかしこれらは対立する機能ではなく、標示の二つのアスペクトである。その制限機能は「dhātu」の多義語性 (anekārthatva) を前提する。「dhātu」の意味としてx、y、zという複数のものが想定されるとき、「upasarga」がそれと共使用されることによって、その「dhātu」の意味xが顕現するということは、その「dhātu」の意味がy、zを排除してxに制限されるということである。パタンジャリによれば、√pacが「upasarga」〈pra〉に先行されることなく単独で使用されたときに理解される料理行為が、同じ√pacが〈pra〉に先行されて使用されたときには卓越性などに限定されたものとして理解される。このことは次のように説明され得る。√pacは料理行為一般を表示する。すなわち、上手な料理も下手な料理もどのような料理行為をも表示し得る。今√pacが「upasarga」〈pra〉と共使用されたとしよう。この場合、優れた、上手な料理行為が〈pra〉によって顕現せしめられるのであり、当該の√pacの意味は上手な料理行為に制限されるのである。ナーゲーシャの以下のような当該Bhāṣyaの趣旨説明はこの線に沿ったものである。

「[Bhāṣyaの]『〈pra〉は限定する』というのは、[〈pra〉が] √pacが卓越した [料理] 〈行為〉を意図しているということ (utkṛṣṭakriyāparatva) を標示する、という意味である。」[199]

そしてこのような場合〈pra〉によって顕現せしめられるもの、すなわち標示対象は、料理行為自体は√pacそのものによって理解されるものであるということに徴し、その料理行為の限定者である卓越性などに求められるのである。

さてそれではカーティアーヤナが「「upasarga」は〈行為〉の限定者である」

と言うことによって何を意図しているのかといえば、言うまでもなくそれは「upasarga」は〈行為〉の表示者ではないということであり、anvayaとvyatirekaに基づく推理によって、〈行為〉に対する限定者が「upasarga」に対応する意味（それの標示対象）とみなされ、〈行為〉そのものは「dhātu」に対応する意味（表示対象）とみなされる、ということに他ならない。ナーゲーシャは次のように述べている。

「anvayaとvyatirekaに基づく推理によって接辞が［ある特定の］意味を理解せしめるものであると［確立される］ように、その同じ［anvayaとvyatirekaに基づく推理］によって「upasarga」は〈行為〉の差異化要素を標示し、「dhātu」だけが〈行為〉を表示する［と確立される］。」[200]

そしてこのように「upasarga」は〈行為〉に対する限定者に対応し、〈行為〉に対応するのは「dhātu」だけであるということが確立される場合、「upasarga」と「dhātu」からなる複合体に対する術語「dhātu」の意味論的な定義規則の過大適用は回避されることになるのである。

ところで、{adhyeti}（adhi+√iK+lAṬ）{adhīte}（adhi+√iṄ+lAṬ）という事例の場合、√iK，√iṄは常に〈adhi〉と共に使用され、〈adhi〉との複合体を通じてそれぞれ想起、ヴェーダ学習を意味する。このような事例においては、〈pra〉+√pacの場合とは違って、「dhātu」√iK，√iṄは「upasarga」〈adhi〉を逸脱せず、それらが単独で使用される場とそれらに〈adhi〉が先行して使用される場を想定することができない。したがってこれらにおいては、「dhātu」それ自体が使用されたときに理解される〈行為〉を「upasarga」〈adhi〉が限定する、すわわちそれが〈行為〉に対する限定者を標示するという構造をそれ自体としては確立し得ない。このような場合、「upasarga」は〈行為〉に対する限定者に対応し、〈行為〉に対応するのは「dhātu」だけであるということは確立されず、したがって「upasarga」と「dhātu」からなる複合体に対する術語「dhātu」の意味論的な定義規則の過大適用を回避することができない。

パタンジャリはこのような問題に対して、当該事例における「upasarga」〈adhi〉の標示者性を、「upasarga」〈adhi〉は「dhātu」√iK，√iṄを逸脱するという

ことに着目して確立する。すなわち彼は、〈adhi〉が√iK，√iṄ以外の「dhātu」と共に使用される事例において〈adhi〉に対して措定される〈行為〉に対する限定者としての〈上位性〉（uparibhāva）すなわち卓越性（utkarṣa）を当該事例の〈adhi〉に関しても類推的に確立しようとするのである[201]。これは、adhi＋√iKからは優れた、卓越した想起という〈行為〉が、adhi＋√iṄからは優れた、卓越したヴェーダ学習という〈行為〉が理解されるということを前提することに他ならない。しかし、他の「dhātu」と共使用される場に見いだされる〈上位性〉に対する標示者性が、当該事例の〈adhi〉に関しても、それが同じ〈adhi〉であるという点において確立されるとするならば、行為に対する表示者性は√iKあるいは√iṄに限定され、adhi＋√iK，adhi＋√iṄという複合体への術語「dhātu」の意味論的な定義規則の過大適用は回避されることになるのでる。

1.4.1.7.4.2. [BHĀṢYA]

［反論］それならば次のような事例、すなわち｛tiṣṭhati｝（√ṣṭhā（sthā）＋ lAṬ，「彼は静止している」）— ｛pratiṣṭhate｝（pra ＋√ṣṭhā（sthā）＋ lAṬ，「彼は進行している」）[202]においては、明らかに異なれる意味（arthāntara）が理解される。｛tiṣṭhati｝と言われたときには√vraj[203]の意味する〈行為〉（vrajikriyā）［すなわち進行行為］の排除（nivṛtti）が理解され、｛pratiṣṭhate｝と言われたときには√vrajの意味する〈行為〉［進行行為］が理解される。それゆえ我々は次のように考える。

このことは「upasarga」に基づく。それに基づいてこの事例［すなわち、｛pratiṣṭhate｝］においては√vrajの意味する〈行為〉［進行行為］が理解される。

［答論］この［｛pratiṣṭhate｝中の］〈pra〉は、［意味指示上に］逸脱が見られるから（dṛṣṭāpacāraḥ）[204]、開始段階の〈行為〉（ādikarman）を［も］指示する。

そして、「dhātu」は複数の意味をも担うということ（bahvarthā api

dhātavo bhavanti)、このことは否定され得ない。たとえば、√vap[205]は、種蒔き (prakiraṇa) の意味で [使用されるのが] 見られる一方で、さらには切断 (chedana) をも指示する。[たとえば] {keśaśmaśru vapati} (「彼は頭髪と顎髭を刈っている」) というように。√īḍ[206]は賞賛 (stuti)・命令 (codanā)・懇請 (yāñcā) の意味で [使用されるのが] 見られる一方で、さらには誘発 (preraṇa) をも指示する。[たとえば] {agnír vā́ itó vṛṣṭim ṭṭṭe marúto 'mútaś cyāvayanti} (「実に火神Agniは此方で雨を誘い、暴風雨神Marut神群は彼方よりもたらす」) [207]というように。√kṛ[208]は以前には存在しなかったものの顕現化 (abhūtaprādurbhāva) の意味で [使用されるのが] 見られる一方、さらには汚れ落とし (nirmalīkaraṇa) をも指示する。[たとえば] {pṛṣṭhaṁ kuru} (「背をきれいにせよ」) {pādau kuru} (「両足をきれいにせよ」) というように。これらの事例においては、[{kuru} によって] 「こすれ」({unmṛdāna}) というように理解される。またさらには [√kṛは] 置く [〈行為〉] (nikṣepaṇa) をも指示する。[たとえば] {kaṭe kuru} (「マットの上に置け」) {ghaṭe kuru} (「瓶のそばに置け」) {āśmānam itaḥ kuru} (「石をこちらに置け」) というように。これらの事例においては、[{kuru} によって] 「置け」({sthāpaya}) というように理解される[209]。

同様に、当該事例の場合にも、√ṣṭhā (sthā)そのものが√vrajの意味する〈行為〉[進行行為] を表示し、[その] 同じ√ṣṭhā (sthā)が√vrajの意味する〈行為〉[進行行為] の排除を [表示する]。

[PRADĪPA]

「この [{pratiṣṭhate} 中の] 〈pra〉は」: [〈pra〉は] 他の [意味で] も使用されるから [上記のように言われている]。そしてそれゆえ、他の事例 [すなわち、〈pra〉が√ṣṭhā (sthā)以外の「dhātu」に先行して使用されている事例] において標示される (dyotya) この [〈pra〉の] 意味、まさにそれと同じ [意味が] [{pratiṣṭhate} という] 当該の事例においても [標示される]、というように推理される。

［単一の］「dhātu」も多様な意味を有するから、√ṣṭhā（sthā）そのものが進行（gati）を表示する、と確定される。

ノート（25）

「dhātu」が「upasarga」を逸脱する事例｛prapacati｝の場合には、〈pra〉を√pacがそれ自体で使用されるときに理解される〈行為〉の限定者の標示者とみなすことによって、そして「dhātu」が「upasarga」を逸脱しない、しかし「upasarga」は「dhātu」を逸脱する｛adhyeti｝｛adhīte｝の場合には、〈adhi〉が他の「dhātu」と共使用される事例において認められる標示者性を当該事例の〈adhi〉にも確立することによって、術語「dhātu」の定義規則の過大適用が回避された。次に取り上げられるのは｛pratiṣṭhate｝である。これは｛prapacati｝と同じように「dhātu」が「upasarga」を逸脱する事例であるが、√sthāが〈pra〉に先行されることなく使用される場合と、それに〈pra〉が先行して共使用される場合とでは、まったく対立する意味が理解され、ここに〈pra〉が〈行為〉に対する限定者として機能する構造は看取されない。前者の場合には、進行行為の排除、すなわち静止が理解され、後者の場合には進行行為が理解される。

この場合次のような困難に直面する。

「その［｛pratiṣṭhate｝という事例］においては、もし進行行為が「upasarga」だけの意味であるとすれば、√sthāは「dhātu」と呼ばれないという結果になる。しかし、単に√sthāだけが［進行行為を］意味するということもない。なぜなら、それはその［進行行為の］排除を意味するからである。一方、［それらの］複合体がその［進行行為を］意味するとすれば、まさにその［複合体］が「dhātu」と呼ばれるという結果になる。」[210]

それから進行行為が理解される｛pratiṣṭhate｝に関して、それの意味としての進行行為はどの項目に配当されるべきか。配当されるべき項目としては、√sthā・pra＋√sthā・〈pra〉の三つの可能性がある。まずパタンジャリは、〈pra〉を進行行為の表示者とみなす見解を提示する。プニィアラージャによ

れば、そのような見解を提示する上での根拠となるものは、√sthāに関して進行の排除すなわち静止の意味はよく知られている (prasiddha) が、進行の意味はよく知られていないという〈習熟性〉(prasiddhi) の基準である。彼は次のように述べている。

「ところで、√sthāが進行の排除の意味で［生起することは］常識としてよく知られているから、〈pra〉という語が進行を表示すると言われる。」[211)]

次にこの見解を否定するためにパタンジャリは、当該事例における〈pra〉に関して標示者性を確立しようとする。すなわち、{adhyeti} {adhīte} の場合と同じように、{pratiṣṭhate} から単なる進行行為そのものではなく、限定的なそれが「彼は進行し始めている」というように理解されると考え、〈pra〉にそれに対応する意味として進行行為そのものではなく、開始段階、初期性という〈行為〉に対する限定者を想定しようとするのである。ところで、〈pra〉は進行行為の限定者である初期性に対する標示者であるということを言うためには、√sthā自体から進行行為も理解されるということが言われなければならない。そこで彼は、√sthā自体の進行行為表示者性ひいてはそれの多義性をも確立しようとする。この多義性の確立が意図するところのものは、ナーゲーシャが次に述べているところのものに他ならない。

「ある事例［たとえば√yaj］においては必然的に想定さるべき多義性 (nānārthatva) そのものによって、［√sthāという］「dhātu」について当該の［進行という］意味が正当化されるとき、〈pra〉という語に［その］意味を想定することには根拠がない、というのがここの基底的考えである。世間でも、まさに初期の進行の〈行為主体〉に関して {pratiṣṭhate} (「彼は進行し始めている」) という使用がある、ということが意図されている。」[212)]

それでは、〈pra〉の標示者性、√sthāの進行表示者性はどのように確立されるのであろうか。当該Bhāṣyaを念頭においてバルトリハリは次のように述べている。

「そして√sthāなどによっては単独ででは理解されない進行行為などに関して、二種の推理 (anumāna) に基づき〈pra〉などはその性質［標示者性］

を有し、[√sthāなどは表示者性という性質を有する] と言われる。」[213]

彼は、当該Bhāṣyaでパタンジャリが〈pra〉の標示者性、√sthāの進行表示者性を確立するために二種の推理を展開していると解しているのである。それではこの二種の推理とは何か、そしてそれらはこれらの確立にどのように関わるのか。この詩頌に対してVṛttiでは次のように述べられている。

「dṛṣṭānumānaによって確定（vyavasthā）がなされる場合とsāmānyatodṛṣṭānumānaによって確定がなされる場合とがある。そのうち—

{pratiṣṭhate} というこの事例における〈pra〉という語は、[{prapacati} といった] 他の事例では行為の開始段階の標示に対して能力のあることが観察される。その [〈pra〉という語] は当該事例においてもまさにその [行為の開始段階] を意味するものに他ならない、と [dṛṣṭānumānaによって] 決定される。

そして [sāmānyatodṛṣṭānumānaによっては、√sthā] 以外の〈行為〉を表示する [「dhātu」] にみられる多義性（anekārthatva）[、それが] それらと共通の [〈行為〉の表示性という] 性質を有する「dhātu」に確立されるから、√sthāについても、進行という意味を表示するものであるということ（gatyarthābhidhāyitva）が、たとえそれは [それに〈pra〉が先行しない] 他の領域では観察されないものであるとしても、この {pratiṣṭhate} という [領域で] 確定される。」[214]

当該事例 {pratiṣṭhate} の〈pra〉の標示者性はviśeṣatodṛṣṭānumānaあるいは単にdṛṣṭānumānaによって確立され、√sthāの進行表示者性はsāmānyatodṛṣṭānumānaに基づいて確定されると考えられているのである。さらにここにおけるそれらの推理をプニィアラージャは次のように定式化している。

【〈pra〉の表示者性—viśeṣatodṛṣṭānumāna】

[主張] [当該の今発声されている {pratiṣṭhate} における] 〈pra〉という語は、行為の開始段階（ādikarman）を標示する。

[理由] 〈pra〉という語であるから（praśabdatvāt）。

[喩例] 過去に発声された（pūrvodita）、√pacなどと共に [使用されるの

が] 観察された (pacādidṛṣṭa) 〈pra〉という語のように[215]。

【√sthāの進行表示者性—sāmānyatodṛṣṭānumāna】

[主張] [当該事例 {pratiṣṭhate} における] √sthā [という「dhātu」] は複数の意味を有する。

[理由] 「dhātu」であるから (dhātutvāt)。

[喩例] 論者・対論者の双方が一致して認める複数の意味を有する√yajなどの「dhātu」のように[216]。

なお、上記の推理式から明らかなように、ここにおけるviśeṣatodṛṣṭānumānaあるいは単にdṛṣṭānumānaとは、推理の主題の「〈pra〉という語であること」(praśabdatva) という特殊性 (viśeṣa) に基づく推理であり、すでに過去に経験されたことがある単一の個物 (dṛṣṭaikavyakti) のもつ関係性の認識に依拠する推理である。一方ここにおけるsāmānyatodṛṣṭānumānaとは、推理の主題の「「dhātu」であること」(dhātutva) という一般的な在り方あるいは共通性 (sāmānya) に基づく推理であり、一般的な遍充関係 (vyāpti) の認識に依拠する推理である[217]。とまれ、以上のように、当該事例における〈pra〉は標示者であり、√sthāは静止以外の〈行為〉をも意味し得る多義語であると確立される場合には、その〈pra〉という「upasarga」と√sthāという「dhātu」とからなる複合体全体への術語「dhātu」の過大適用は回避されることになるのである。

ところで、当該Bhāṣyaは、{pratiṣṭhate} に「開始された進行」という意味を想定して議論を展開した。これは、当該Bhāṣyaの議論がvt.7の「upasarga」は〈行為〉の限定者であるという見解の枠組みでなされているからである。実際には〈pra〉が標示者として機能する場合、その複合体から単なる進行行為が理解されるということには何等不都合な点はない。なぜなら、√sthāそれ自体が静止と進行という複数の意味を有し、それと〈pra〉が共使用されたときに、その〈pra〉によって進行が顕現せしめられ、√sthāの意味がその進行に制限される、と考えることができるからである。もし当該事例における〈pra〉に関して次のようなsāmānyatodṛṣṭānumānaを適用すれば、それに関

して標示者性一般も確立されるはずである。

［主張］{pratiṣṭhate} における〈pra〉という語は標示者である。

［理由］「upasarga」であるから。

［喩例］{prapacati} における〈pra〉という語のように[218]。

パタンジャリがこのことまで意図していたかどうかは明らかではないが、バルトリハリが上記の詩頌で「二種の推理」というとき、彼はその適用対象として「dhātu」を除く「upasarga」〈pra〉だけを意図していたと考えることも可能である。プニィアラージャは明らかに「二種の推理」を〈pra〉にも適用している。彼は、当該詩頌の注釈の中で次のようにも述べているからである。

「√sthāは常識的には進行の排除（gatinivṛtti）を表示する。よってそれ単独ででは進行（gamana）は理解されない。したがって「dhātu」は複数の意味を有すると考えて、推理に基づきそれは進行をも表示し、一方「upasarga」はまさにその［進行］を標示すると確定される。」[219]

いずれにせよ、当該〈pra〉の標示者性が確立されるとき、その〈pra〉に対してもそれを含む複合体に対しても術語「dhātu」が適用されることはない。

追加参照文献・略号

小川英世 [1989]「Mahābhāṣya ad P1.3.1研究(2)」[1993]「(4)」[1994]「(5)」[1995]「(6)」『広島大学文学部紀要』第48、53、54、55巻

Nir. Yāska's Nirukta. *The Nighaṇṭu and the Nirukta*. Ed. L. Sarup. Delhi: Motilal Banarsidass, 1967².

Vṛtti. *Vākyapadīya of Bhartṛhari, Kāṇḍa II: Containing the Ṭīkā of Puṇyarāja and the Ancient Vṛtti*. Ed. K. A. Subramania Iyer. Delhi: Motilal Banarsidass, 1983.

Mānameyodaya. *Mānameyodaya of Nārāyaṇa*. Ed. C. Kunhan Raja and S. S. Suryanarayana Sastri. Adyar: The Adyar Library and Research Centre, 1975².

注

180) Cf. Vājasaneyiprātiśākhya8.55: kriyāvācakam ākhyātam upasargaḥ viśeṣakṛt / sattvābhidhāyakam nāma nipātaḥ pādapūraṇaḥ //

181) dhātupāṭha II.38 {iK smaraṇe} (「iKは想起の意味で［生起する］」) ; II.37 {iṄ adhyayane} (「iṄは学習の意味で［生起する］」)。√iṄはṅitであるから、それに後続するtiṄ接辞としてはP1.3.12に基づき「ātmanepada」接辞が選択され、√iKの場合にはP1.3.78に基づき「parasmaipada」接辞が選択される。P1.4.80に基づき、「upasarga」は「dhātu」に先行して使用されるが、√iK, √iṄは常に「upasarga」〈adhi〉に先行され単独では使用されない。MDhV 357: iṅ adhyayane / nityam adhipūrvaḥ; 359: ik smaraṇe / ayam apy adhipūrvaḥ.

182) Cf. Nir. I.3: adhi ity uparibhāvam aiśvaryaṃ vā.

183) ナーゲーシャによれば、uparibhāvaとは卓越性（utkarṣa）に他ならない。Uddyota: utkarṣalakṣaṇa uparibhāvo 'dher arthaḥ. したがって {adhīte} {adhyeti} の意味はそれぞれ要するに「彼は優れたヴェーダ学習をなしている」「彼は優れた想起をなしている」ということである。ヴェーダ聖典の読誦の場合、その卓越性は、ヴェーダ聖典の内容上の卓越性、あるいはその読誦が諸規定に則ったものであるという点に求められる。ナーゲーシャは、さらに第三の解釈として、意味内容の理解にまで達するまでのものとしての読誦に卓越性を求める説を紹介している。Uddyota: kecit tv avagamaparyantatvarūpa utkarṣo 'dher artha ity āhuḥ. また、想起の卓越性は、同じくナーゲーシャによれば、その不断の様などに求められる。Uddyota: viśiṣṭaṃ smaraṇam iti / nirantaratvādikaṃ tatrotkarṣaḥ.

184) 詳細は小川［1995］を見よ。

185) Uddyota: tad evaṃ sapratyayake 'tivyāptiṃ nirasya sopasarge tāṃ nirākaroti bhāṣye kriyāviśeṣaka upasarga iti. (「それゆえ［パタンジャリは］以上のように接辞を伴う［「dhātu」］に対する［術語「dhātu」の定義規則の］過大適用を退け、次に「upasarga」を伴う［「dhātu」に対する］その［「過大適用］を否定する。・・・」)

186) P6.4.71 luṅlaṅlṛṅkṣv aḍ udāttaḥ. (「lUṄ（直説法アオリストL接辞）・lAṄ（直説法過去L接辞）・lṚṄ（条件法L接辞）が後続するとき、「aṅga」はオーグメントaṬをとり、そしてそれは「udātta」アクセントをとる。」) 術語「aṅga」については、小川［1989］注46を参照せよ。P1.1.46に基づき、IT－Ṭを有するaṬは「aṅga」の先頭要素となる。

187) VPII, k.180: aḍādīnāṃ vyavasthārthaṃ pṛthaktvena prakalpanam / dhātūpasargayoḥ śāstre dhātur eva tu tādṛśaḥ //

188) 以下のパタンジャリの言明を指す。Mbh ad P3.1.12: avaśyaṃ saṅgrāmayateḥ sopasargād utpattir vaktavyā—asaṅgrāmayata śūra ityevamartham. (「「upasarga」

を有する項目sam+√grāmaの後に［tiṄが生起するように］必ずṆiCが生起する、と言われるべきである。{asaṅgrāmayata śūraḥ}（『戦士は戦った』）という事例における {asaṅgrāmayata} という［語形を説明する］ために。」）ナーゲーシャによれば、当該言明中の「必ず」(avaśyam) という語によって、〈sam〉の前にオーグメントaṬが付されるということも示唆されている。sam + √grāma + ṆiC + lAṄ(P3.1.32)→sam + √grām φ + ṆiC + lAṄ (6.4.48)→sam + √grām + ṆiC + ta(P3.4.78)→sam + √grām + ṆiC + ŚaP + ta→sam + √grām + e + ŚaP + ta(P7.3.84)→sam + √grām + ay + ŚaP + ta(P6.1.78)→aṬ + sam + √grām + ay + a + ta(P6.4.71)→asaṃgrāmayata(P8.3.23)→asaṅgrāmayata(P8.3.59)

189) VPII, k.181: tathā hi saṃgrāmayateḥ sopasargād vidhiḥ smṛtaḥ / kriyāviśeṣāḥ *saṃghāte* prakramyante tathāvidhāḥ // Iyer, Raghunatha: saṅghātaiḥ.

190) 次の限定者（viśeṣaṇa）としてのguṇaの定義が参照さるべきである。VPIII, guṇa, k.1: saṃsargi bhedakaṃ yad yat savyāpāraṃ pratīyate / guṇatvaṃ paratantratvāt tasya śāstra udāhṛtam //

191) Mbh on vt. 4 ad P2.1.1: upasargāś ca punar evamātmakā yatra kaścit kriyāvācī śabdaḥ prayujyate tatra kriyāviśeṣam āhuḥ. ナーゲーシャはここにおける〈kriyāviśeṣa〉を「〈行為〉に存する差異化要素」(kriyāgato viśeṣaḥ) というように解釈している。P1.4.59は〈pra〉などは〈行為〉と結びつくとき（kriyāyoge）「upasarga」と呼ばれることを規定しているが、これらのカーティアーヤナ、パタンジャリの言明から、彼らがその〈行為〉との結合を〈行為〉との限定関係と捉えていることが明らかとなる。

192) VPII, k.187: kva cit saṃbhavino bhedāḥ kevalair anidarśitāḥ / upasargeṇa saṃbandhe vyajyante *pranirādinā* // Iyer, Raghunatha: praparādinā. Cf. prādigaṇa: pra parā sam anu ava nis nir dus dur vi āṅ ni adhi api ati su ut abhi prati pari upa.

193) Puṇyarāja: kvacit pacatyādau prakarṣādīnāṃ sambhavāt kevalais teṣām apratīter upasargasambandhāt tadavagama iti teṣūpasargāṇāṃ viśeṣadyotakatvam ucyate.

194) VPII, k.188: sa vācako viśeṣāṇāṃ saṃbhavād dyotako 'pi vā / śaktyādhānāya vā dhātoḥ sahakārī prayujyate //

195) Vṛtti on VPII, k. 188: vācakatvaṃ dyotakatvaṃ sahābhidhāyitvam ity upasargeṣu trividhā pratipattir ācāryāṇām / tatrānabhihitam artham apy āropayan vācaka iti pratijñāyate / sambhavinam artham anabhivyaktam abhivyañjayan dyotaka ity abhyupagamyate / svabhāvataḥ prāptaniyataśaktimātram ādadhat svārthikavat sahābhidhāyī vyavasthāpyate.

196) Cf. Mbh ad P1.1.28: svārthikāḥ pratyayāḥ prakṛtito 'viśiṣṭā bhavanti. (「svārthika接辞は［表示する意味に関して］基体とは区別されない。」)

197) Vṛtti on VPII, k. 164: dyotanam api dvividham / anāvirbhūtāvirbhāvanam, avyudāsaprasaṅge vā prakārāntaravyudāsena kasyacid avadhāraṇam. . .

198) Vṛtti on VPII, k. 187: śabdāntaropagraham antareṇa sambhavī sann alabdhaniyamo yo 'rthas taṃ dyotako niyamayan vācakatām atikrāmatīti saṅgrahakāra āha / aprāptaniyamaḥ kevale dhātau kriyāsāmānyavācini kriyāviśeṣaḥ prapacati prakarotīty upasarganipātena vyajyate.

199) Uddyota on Mbh ad P1.3.1: provīti / pacer utkṛṣṭakriyāparatvaṃ dyotayatīty arthaḥ.

200) Uddyota on Mbh ad P1.3.1: yathānvayavyatirekābhyāṃ pratyayo 'rthabodhakas tathā tābhyām eva kriyāviśeṣadyotaka upasargaḥ, kriyāvācī dhātur eva.

201) Cf. Uddyota: dhātor upasargāvyabhicāre 'py upasargasya dhātuvyabhicārād anyatra dyotyatvena niścito 'rtha evehāpy adheḥ. (「［当該事例の場合］「dhātu」 (√iK, √iṄ) は「upasarga」 (〈adhi〉) を逸脱するとしても、「upasarga」 (〈adhi〉) は「dhātu」 (√iK, √iṄ) を逸脱するから、他の［〈adhi〉が√iK, √iṄ以外の「dhātu」と共に使用される］事例においてまさに［それにより］標示さるべきものとして確定された意味が当該事例の場合も〈adhi〉の［意味である］。」) カイヤタもナーゲーシャも当該事例における〈adhi〉に関してどのように〈上位性〉という意味が確立されるのかについては説明を与えていない。しかし、それが推理に基づくことは明らかである。カイヤタは後で述べるように {pratiṣṭhate} の〈pra〉が行為の開始段階を意味することは推理に基づいて確立されると説明しているが、それと同じことがこの場合にも言えるからである。おそらくその推理は次のような形式のものであろう。「［主張］［当該事例における］〈adhi〉は〈上位性〉を標示する。［理由］〈adhi〉という語であるから。［喩例］他の事例における〈adhi〉という語のように。」

202) dhātupāṭha I.975 {ṣṭhā gatinivṛttau} (「ṣṭhā＝sthāは進行の排除の意味で［生起する］」)。P6.1.64によりdhātupāṭha中の登載項目の先頭にある/ṣ/音は無条件に/s/音によって代置され、そのことによってP8.4.41は効力を失い/ṭh/音は/th/音となる。√ṣṭhāは、P1.3.78に基づき「parasmaipada」接辞をとり、それに「upasarga」〈pra〉が先行するときにはP1.3.22に基づき「ātmanepada」接辞をとる。

203) dhātupāṭha I.271—2 {vájá vrájá gatau} (「vájá, vrájáは進行の意味で［生起する］」)。

204) 次のパタンジャリの〈dṛṣṭāpacāra〉の用法を参照せよ。Mbh ad P2.3.4: antareṇaśabdo dṛṣṭāpacāro nipātaś cānipātaś cāyaṃ tu antarāśabdo 'dṛṣṭāpacāro nipāta eva. (「〈antareṇa〉という項目には逸脱が見られるものとして「nipāta」と

呼ばれるものと「nipāta」と呼ばれないものとがある。これに対して〈antarā〉という項目には逸脱が見られないものとして「nipāta」と呼ばれるもののみだけがある。」)なお、カイヤタはこのBhāṣya中の〈dṛṣṭāpacāra〉を〈dṛṣṭavyabhicāra〉という語によって説明している。

205) dhātupāṭha I.1052 {*ḍu*vapà bījasaṃtāne} (「*ḍu*vapàは種蒔きの意味で［生起する］」)。

206) dhātupāṭha II.9 {*ṭḍa* stutau} (「*ṭḍa*は賞賛の意味で［生起する］」)。

207) Maitrāyaṇī-saṃhitā II.1.8. Uddyota: vṛṣṭim iṭṭe iti / prerayatīty arthaḥ.

208) dhātupāṭha VIII.10 {*ḍu*kṛñ karaṇe} (「*ḍu*kṛñは為す・もたらすの意味で［生起する］」)。

209) パラレルな言明がMbh ad P6.1.9, 45に見いだされる。パタンジャリはこのような形でひとつの「dhātu」が複数の意味を表示するという「dhātu」の多義性を例証する。

210) Uddyota: tatra vrajikriyāyāṃ upasargamātrārthatve tiṣṭhater dhātutvānāpattiḥ, tiṣṭhatimātrasya tu nārthaḥ, tasya tannivṛttyarthakatvāt / viśiṣṭasya tadarthakatve tu tasyaiva dhātutvāpattiḥ.

211) Puṇyarāja on VPII, k.189: gatinivṛttau tu prasiddhatvāt tiṣṭhateḥ praśabdasya gativācakatvam ucyate... Cf. Vṛtti on VPI, k. 106: sarvatra [hi] prasiddhir evārthavyavasthākaraṇam.(「実にいかなる場合も〈習熟性〉こそが意味特定化の根拠である。」) 因みに〈習熟性〉は、文法学派の言語理論を特徴づける「言語は潜在可能的にいかなる意味をも表示し得る」というyogyatā理論における意味の有限性を説明するための意味特定化の原理である。この原理に依拠することによって〈習熟性〉の点で√sthāに静止という意味が配当されるからといって、そのことからは必ずしも√sthāが静止という意味だけを有するということにはならない、ということが示唆されているのである。

212) Uddyota: dhātoḥ kvacid avaśyakalpyanānārthatvenaiva prakṛtārthanirvāhe praśabdasyārthakalpane mānābhāva iti bhāvaḥ / loke 'pi prathamagamanakartary eva pratiṣṭhata iti prayujyata iti tātparyam.

213) VPII, k.189: sthādibhiḥ kevalair yac ca gamanādi *na* gamyate / tatrānumānād dvividhāt taddharmā prādir ucyate // Raghunatha: tu.

214) Vṛtti: kvacid dṛṣṭenānumānena vyavasthā kriyate / kvacit sāmānyato dṛṣṭenānumānena / tatra pratiṣṭhata ity atra praśabdo 'nyatrādikarmadyotane dṛṣṭasāmarthyaḥ, sa ihāpi tadartha evāvasīyate / anyeṣāṃ ca kriyāvacanānām anekārthatvaṃ tulyadharmāṇāṃ dhātūnāṃ prasiddham iti tiṣṭhater apy adṛṣṭaṃ viṣayāntare gatyarthābhidhāyitvaṃ pratiṣṭhata ity atra vyavasthāpyate.

215) Puṇyarāja: tatrāviśeṣeṇopasargāṇāṃ dyotakatvaṃ / tathā ca praśabdo

dharmī ādikarmadyotaka iti sādhyo dharmaḥ praśabdatvāt pūrvoditapacādidṛṣṭapraśabdavad iti /[1] viśeṣato dṛṣṭenānumānena [/][2] taddharmapraśabdasya samānadharmā sarvo 'pi prādir upasargo dyotakatvadharmayukta ucyata iti. /[1]をはずし[/][2]を挿入して読む。[/][2]以降はsāmānyatodṛṣṭānumānaの適用による〈pra〉に関する標示者性の確立を述べたものである。

216) Puṇyarāja: dhātuś ca sāmānyato dṛṣṭenānumānenānekārthaḥ / yathā tiṣṭhatir dharmmī anekārtha iti sādhyo dharmo dhātutvād, ubhayavādisammatānekārthayajatyādidhātuvad iti / evaṃ sāmānyato dṛṣṭānumānāt taddharmānyo dhātur anekārtha ucyate. . . √yajの多義性についてパタンジャリは次のように述べている。Mbh on vt. 4 ad P3.1.26: nānākriyā yajer arthaḥ / nāvaśyaṃ yajir haviḥprakṣepaṇa eva vartate / kiṃ tarhi, tyāge 'pi vartate. (「√yajは多様な〈行為〉を意味する。必ずしも√yajは供物の投入だけを指示するわけではない。［問い］それでどうなのか。［答え］［√yajは］譲渡（tyāga）をも指示する。」)

217) ミーマーンサー学派（バーッタ派）もこのような二種の推理を認める。Cf. Mānameyodaya 62: tac ca punar api dvedhā dṛṣṭaṃ sāmānyato dṛṣṭaṃ ceti / tatra — dṛṣṭaikavyaktiviṣayaṃ dṛṣṭam iṣṭaṃ hi mādṛśām / kṛttikodayam ālakṣya rohiṇyanumitir yathā // evaṃ sāmānyato vyāptidṛṣṭyā yatrānumīyate / tad dhi sāmānyato dṛṣṭaṃ yathā vahnyanumādikam // (「そしてさらにそれ［推理］は、（1）［推理主題が］過去に観察されたことのある［推理］（dṛṣṭa）と（2）［推理主題が］その一般的な在り方から観察される［推理］（sāmānyatodṛṣṭa）というように二様に［考えられる］。そのうち、『実に我が同士は過去に観察された単一個物を対象とするものを（1）の推理であると認める。これは、たとえば、第3宿（kṛttikā）を看取して第4宿（rohiṇī）を推理する場合である。』『同様に、［我が同士は］一般的な遍充関係の知覚に基づいて［あるものが］推理されるとき、その推理は（2）である［と認める］。これは、たとえば、［煙から］火を推理する場合である。』」)
なおここではこの推理の二種性は、推理対象の知覚可能性・知覚不能性の別によるものではないという点に留意さるべきである。したがって〈行為〉推理論の文脈でのsāmānyatodṛṣṭānumānaとここでのそれは異なると言わなければならない。Mānameyodayaでは推理対象の知覚可能性の点から二種の推理を考えるニャーヤ学派に対する批判が上記引用に続けて展開されている。〈行為〉推理論については、小川［1994］を参照。

218) Cf. VSLM609: tiṣṭhater dhātutvena yajādivad anekārthatvād dhātor eva gatir arthaḥ / praśabdas tu dyotaka eva, upasargatvāt, prapacatīyādisthapraśabdavat . . .

219) Puṇyarāja: tiṣṭhatir gatinivṛttiṃ prasiddhyābhidadhāti / ataḥ kevalena tena gamanaṃ na pratipādyata ity anekārthā dhātava iti kṛtvānumānād

gativācakatvam api tasya vyavasthāpyate, upasargas tu taddyotaka eva. 注215を参照。ナーゲーシャは当該Bhāṣyaに対するUddyotaにおいてはこの点について何も語っていないが、他の著作では当該Bhāṣyaから〈pra〉の進行標示者性に対する意図をも読みとっている。VSLM593: pratiṣṭhata ity atra tiṣṭhatir eva dhātūnām anekārthatvād gativācī / praśabdas tu tadarthakatvasya, tadgatāditvasya bodhaka iti bhūvādisūtre bhāṣye spaṣṭam. カイヤタは他のある箇所では次のように〈pra〉が進行 (gati, prasthāna) そのものの標示者であることを明言している。Pradīpa on Mbh ad P2.2.6: yathā pratiṣṭhata ity atra yady api tiṣṭhatir eva gativacanas tathāpi tasmin kevale prayujyamāne prasthānaṃ na gamyata iti dyotakatvena praśabdo 'pekṣyate tatheha nañ. (未完)

A STUDY OF THE MAHĀBHĀṢYA AD P1.3.1 (7)

Hideyo OGAWA

SYNOPSIS (7)

1.4.1.7.4(.1—2). The objection has been made in *vt*. 3 (*kriyāvacana upasargapratyayapratiṣedhaḥ*) that if the definition of the term *dhātu*: *kriyāvacano dhātuḥ* is accepted, then one will have to deny the term *dhātu* to a complex item consisting of an *upasarga* and a *dhātu*. Now this objection is met in *vt*. 7 (*kriyāviśeṣaka upasargaḥ*): An *upasarga* is a qualifier of an action. In this *Vārttika*, Kātyāyana wishes to imply that a meaning supposed to be in reference to an *upasarga* is not an action itself but its qualifier, so that the term *dhātu* is applied neither to an *upasarga* nor to such a complex item as mentioned above.

In order to illustrate this, Patañjali adduces three types of instances: *prapacati*, *adhyeti* or *adhīte*, and *pratiṣṭhate*.

i) *prapacati* This is a typical example to show that an *upasarga* is in reference to a qualifier of an action: The *upasarga pra* qualifies the action of cooking as understood when *pac* is separately used from the *pra*. In connection with this, it is to be noted that Pāṇinīyas hold that an *upasarga* has the property of revealing a qualifier of an action (*kriyāviśeṣadyotaka*).

ii) *adhyeti*, *adhīte* These are the instances in which a *dhātu* does not deviate from an *upasarga*. In these examples, it is hard to say of the *upasarga adhi* that it qualifies the action which would be understood

if the *dhātu iK* or *iṄ* were used independently, since there is no possibility of their occurring without *adhi*. In order to solve this sort of difficulty, Patañjali points out the fact that *adhi* deviates from those *dhātu*-s and thereby suggests that if it is definitely determined, in the instances where *adhi* is used with other *dhātu*-s, that *adhi* reveals qualifiers of actions, as does *pra* in *prapacati*, then it will be established that the *adhi* in the present instances also has the same nature. As stated below, when establishing that the *pra* in *pratiṣṭhate* has the revealing property, Patañjali is said to resort to inference. The same is true of the *adhi* in the present instances.

iii) *pratiṣṭhate* This is the instance in which, although an *upasarga* and a *dhātu* deviate from each other, an action understood when a *dhātu* is used independently is different from the one understood when it is used with an *upasarga*. In the present instance the act of staying is understood from *tiṣṭhati* and the act of going from *pratiṣṭhate*, so that one cannot say of the *pra* that it serves to qualify an action. For an action to be qualified, which should be understood when *sthā* is used separately from the *pra*, is not found here. As explained by Bhartṛhari and his followers, by resorting to two kinds of inference: *dṛṣṭānumāna* and *sāmānyatodṛṣṭānumāna*, Patañjali makes out that the *upasarga pra* in *pratiṣṭhate* is a revealer of a qualifier of the act of going and that the *dhātu sthā* there can denote that act as well as the action of staying, whereby he establishes that the *sthā* alone denotes the action of going.

(*To be continued.*)